

三つの伝説：『更級日記』上洛の記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西木, 忠一 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4733

三つの伝説

—『更級日記』上洛の記—

西 木 忠 一

一 はじめに

父菅原孝標らとともに十歳の時上総の国に下っていた孝標女が、寛仁四年（一〇二〇）九月三日に上京するために門出し、京に入つたのは同年十二月二日であった。その間、ほぼ九十日の旅であった。時に彼女十三歳である。

その旅を記す「上洛の記」は『更級日記』のほぼ二割を占めるもので、五十年を越える人生を回想する『更級日記』では、あまりに異常な長さである。

孝標女はその「上洛の記」において三つの伝説を記した。

「まののてう」伝説

竹芝寺伝説

富士川伝説

がそれである。

すでに、玉井幸助氏は「現実を離れた美しい世界にあこがれる心

は伝説を愛するものである。文学少女であった作者が伝説に深い関心を寄せたのは当然」と指摘され、また、関根慶子氏も「京への旅は、この少女にとって物語へのおこがれの道行でもあった。その彼女が道中で聞いた伝説は物語世界への夢をふくらませることにものなるう。物語を愛する心は、自然、伝説に対する関心と呼んだのである」と述べられた。

本放ではこの三つの伝説が日記執筆時の孝標女に、いかなる意味をもって記憶に残されたのかを柱として、考察するものである。

二 「まののてう」伝説

十七日のつとめて立つ。昔、下総の国に、まののてうといふ人住みけり。疋布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな

柱、川の中に四つ立てり。人々歌よむを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱残らずは

昔の跡をいかで知らまし(ママ)

右が「まののてう」伝説である。「まの」は「千葉県浜野市」のあたりといわれ、「てう」は長者のことをいう。

孝標女は門出して十五日にこの伝説の地に至ったという。彼女はここで「朽ちもせぬ」の歌を「心のうち」に詠じたのであったが、彼女が「上洛の記」で詠んだ歌は、実は三首のみであったということになる。それは『更級日記』に見える全歌数八十八首から見れば、これも至って異常である。

序でながら「上洛の記」中に見える他の二首を示しておこう。第二首目は「その夜、くろとの浜といふ所にとま」り、「人々をかしがりて歌よみなどする」ので、彼女も

まどろまじ今宵ならではいつか見む

くろとの浜の秋の夜の月

と心のうちに詠んだ。そして第三首目は「宮路の山といふ所」を越えたのが「十月つごもり」であったというのに、「紅葉散らで盛り」であったため

嵐こそ吹き来ざりけれ宮路山

まだもみぢ葉の散らで残れる

と詠んだのであった。この歌は『玉葉和歌集』巻第六（冬歌）にあづまよりのぼるとて、みかほの国みやぢの山を十月つごもり

にすぐるに、紅葉まださかりに見えければ

菅原孝標朝臣女

と詞書きして入集している。

さて、孝標女が宮路にて詠んだ「朽ちもせぬ……」の歌にもどろう。

朽ちもせぬ長柄橋の橋柱ひさしきことのみえもするかな(兼盛集)

盛集

橋柱なからましかばながれての名をこそきかめ跡をみしま(ママ)や(兼盛集)

などの歌と、孝標女の歌の用語が共通するところから、杉谷寿郎氏は「孝標女は『まののてう』(原文「まのしてら」)家の昔の柱が川の中にまだ残っているのを見て、長柄橋の歌表現を思い合わせ、それを援用して歌を作ったのである」と述べられたが、確かに「長柄橋」を詠じた歌との用語の共通は否定しがたく、杉谷氏のご指摘のごとくである。

ところで、孝標女が

朽ちもせぬこの川柱残らずは

昔の跡をいかで知らまし

と詠んだ時、それは彼女十三歳の晩秋であったろうかという疑問が湧く。それは、津本信博氏も

この歌は、当時十三歳の少女にしては臆長けた内容である。長者の没落の悲劇を説くことに、伝説を好む孝標女の意図があったものと思われる。その意図から言えば、この歌は当時の彼女の年

齡では理解することは難しく晩年の創作ではないかとも思われる。^(注)と推測されたところであるが、長者没落の悲劇に彼女は十三歳なりに感じたがゆえに、こうして「上洛の記」に記しおいたのであったろう。津本氏の推測されたごとく、この歌が仮りに晩年の創作であったとしても、晩年まで彼女の心奥に残されて来たのは、あの若き日の彼女なりの思いがあったからである。

では、「まののてう」伝説を作者が知ったのはいかなる方法によつたのであつたらう。「……まののてうといふ人すみけり」と記しているの、彼女らは誰かから聞いたのであろう。「渡し守」からも知れない。しかし、この伝説を記す時、彼女は「……と語る」とは記さなかった。それは続く二つの伝説の記述方法と関わりがあるように思われる。

三 竹芝寺伝説

(一)

今は武蔵の国になりぬ。ことにをかきしき所も見えず。浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで高く生ひしげりて、中をわけゆくに、竹芝といふ寺あり。はるかに、ははさうなどいふ所のらうの跡の礎などあり。

こうして語り出される「竹芝寺伝説」は「数ある伝説の中でも稀に

見る美しい物語」であつて、仮りに「更級日記がこれを書きのこしてくれなかつたら、永久にこの伝説が失なわれてしまったのだ」と^(注)思うにつけ、文学史上における『更級日記』の価値が改めて思われよう。

「火焚屋の火焚く衛士」として、国司が朝廷に「たてまつりたる男が、「御前の庭を掃く」折に、生起した皇女との関わりを、かくも長々と記されたことであろう。

わが国に七つ三つ造り据ゑたる酒壺に、さし渡したる直柄の瓢の、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見て、かくてあるよ

と火焚屋の衛士が「ひとりごちつぶやく」。そんな衛士の姿を見た「みかどの御むすめ」が、「いみじくゆかしくおぼされ」、酒壺に「さし渡したる直柄の瓢」のなびく様子に興味を抱き、「われ率ひ行きて見せよ。さ言ふやうあり」と「仰せられ」たのであつた。こうした挙句に衛士の男が皇女を「負ひたてまつりて下」り、「瀬田の橋のもとにこの宮を据ゑたてまつりて、瀬田の橋を一問ばかりこぼちて、それを飛び越えて」、「七日七夜といふに」武蔵国に行き着いたという。

京から武蔵への下向は、『延喜式』によれば十五日を所要日数とする。というのに、この男は途方もない日数にて下向し終えたという。近藤一氏が本伝説について「明るい牧歌的な構成や、衛

士の歌ふひさごの歌の素朴な詩情はこの短篇に独特の香気を漂はせてゐる」と評されたことく、ほんのりと漂う「香氣」は読者を魅了する。

京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ

と「身を捨てて額をつきて祈り申」した孝標女は、やっと十三歳の九月三日に「のぼらむ」として門出したのであった。「姉継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語る」のを聞いていた彼女ゆえに、物語への憧憬は極度に高まっていた。そんな彼女の憧れる都から皇女が武蔵へ下って来たという。都へのあこがれがいよいよ高まるのは当然の結果である。直柄の瓢に魅せられてしまった本伝説の皇女は、実は孝標女の姿でもあった筈である。

(二)

さて、伝説の語るところによれば、「みかど、后、皇女失せたまひぬとおぼしまどひ」、果ては武蔵の衛士のあとを追わせた。だが、衛士が武蔵の国へ行き着いたのが「七日七夜」というあまりの早さであったというのに、追手の者たちは「三月といふに、武蔵の国に行き着いたという。所要日数の多さを特に強調したものである」とはいふまでもない。

やっと辿り着いた使者達を召した皇女は

われ、さるべきにやありけむ。このをこの家ゆかしくて、率

て行けと言ひしかば率て来たり。いみじくここありよくおぼゆ。と言う。仕方なく帰都した使者の報告を受けた帝は、「竹芝ののこに、生けらむ世のかぎり武蔵の国を預けとらせて、おほやけどもなさせじ、たゞ、宮にその国を預けたてまつらせたまふ」との旨を下したのであった。そして、

この家を内裏のごとく造りて住ませたまつりける家を、宮など失せたまひにければ、寺になしたるを、竹芝寺と言ふなり。その宮の産みたまへる子どもは、やがて武蔵といふ姓を得てなむりける。

と竹芝寺伝説は結ばれるのである。

なお、「竹芝寺」に関して『大日本地名辞書』（吉田東伍著）は、「此竹芝寺の事詳ならざれ共、品川の小名に芝前と云ふ所ありて、往古竹柴の浦の遺名なりと伝ふれば、もしくは彼辺なるにや、三田の濟海寺を竹芝寺の遺蹟と云う説もあれど、其拠をしらず」（武蔵野）、「今詳ならず、三田の濟海寺かといへり」（竹芝寺趾）と見えることを付記しておこう。

(三)

皇女の子が「武蔵」の姓を得たということと関係がありそうな史実として、『続日本紀』神護景雲元年（七六七）十二月壬午に、

武蔵国足立郡人外従五位下文部直不磨等六人賜姓武蔵宿禰。

と見え、続^{ついで}甲申に

外従五位下武蔵宿禰不破磨爲武蔵国々造。正四位上道嶋宿禰嶋足爲陸奥国大國造。従五位上道嶋宿禰三山爲國造。

と見える。また、『将門記』には、

然門、以去承平八年春二月中、武蔵權守興世王、介源経基、与足立郡司判官代武蔵武芝、共各爭不洽之由。如聞、国司者無道爲宗、郡司者正理爲力。其由、何者、縦郡司武芝、年来、恪愼公務有誉無謗。苟武芝、治郡之名、頗聽国内。

とも見えて、「足立郡司判官代武蔵武芝」という人物の存在の見えることは、周知のところである。「この伝説との関係は不明」(新編日本古典文学全集・犬養廉・二八六頁)、「この伝説との関係は未詳」(校注古典叢書・堀内秀晃・一〇頁)などの見解の見えるところであるが、関根慶子氏の

『将門記』には「武蔵武芝」なる豪族のあったことは知られるが、この伝説は片鱗も影を落していないので、その関係はいっさい不明だが、それだけにまた、これは更級日記のみの伝える貴重な資料であるわけだ。

との指摘や、秋山虔氏の

『続日本紀』によると実際に武蔵姓の突然の出現があったのである。……『更級日記』の記述に、男に「武蔵の国を預けとらせ」たとあるのは、これと対応するものらしい。

との解説によって、ますます『続日本紀』・『将門記』と『更級日記』との関わりを考えさせるところであろう。

竹芝寺伝説は「まののてう」伝説に比してその長さが約七倍でもって記される。かつ、そのほとんどが

「いかなる所ぞ」と問う一行に対して、

「これはいにしへ、竹芝といへるさかなり。……それよりのち、火焚屋に女は居るなり」と語る。

と、語り手の語りのみで記される。そして、読者としては当然のこととして、初めて一首なりとも作者の詠歌が予想されようが、それもない。「まののてう」伝説においては、「人々歌よむを聞きて、胸のうちに「朽ちもせぬ……」と詠じたのであった。「上洛の記」中第二首目の「くろとの浜」に宿った折、「人々をかしがりて歌よみなどする」のに促されて、「まどろまじ……」の歌を詠じた。なお、第三首目の「嵐こそ……」の歌を詠じた時、それは「宮路の山」を越える時であったが、作者は人々については何も触れていない。

ところで、「まののてう」伝説と竹芝寺伝説には、両者ともに遺蹟が残っている。前者には

昔の門の柱のまだ残りたるとして、大きな柱、川の中に四つ立

てり。

と記され、後者には

……中をわけ行くに、竹芝寺といふ寺あり。はるかに、ははさうなどいふ所のらうの跡の礎など……と見えることをここで確認しておく。

「まのてう」伝説が人の世の無常を彼女なりに感じて記されたのであり、竹芝寺伝説は物語を「ゆかし」と思う心が記憶させ、それを記すことになったのである。

直接この傳説が「京」につながる物語であるため、「京」への憧れ心が之を捉へたといふばかりでなく、「物語」といふ美しい「夢」をあこがれての道中の途中、はからずも語られたこの傳説に、彼女のあこがれの心を燃焼させたものであったらう。^(註)と清水文雄氏がすでに述べられたところである。

四 富士川伝説

富士川といふは、富士の山より落ちたる水なり。その国の人の出でて語るやう、

と記しはじめて、「国の人」の語りが続く。

一年ごろ、物にまかりたりしに、いと暑かりしかば、この水のつらに休みつつ見れば、川上の方より黄なる物流れ来て、物につ

きて、とどまりたるを見れば、反故なり。取りあげて見れば、黄なる紙に、丹して濃くうるはしく書かれたり。あやしみて見れば、来年なるべき国どもを、除目のごとみな書きて、この国来年空くべきにも、守なして、また添へて二人をなしたり。あやし、あさましと思ひて、取りあげて、乾して、をさめたりしを、かへる年の司召に、この文に書かれたりし、一つたがはず、この国の守とありしままなるを、三月のうちに亡くなりて、またなりかはりたるも、このかたはらに書きつけられたりし人なり。かかることなむありし。来年の司召などは、今年、この山に、そこばくの神々あつまりて為いたまふなりけりと見たまへし。めづらかなることにさぶらふ。

以上がその語りである。この伝説も竹芝寺伝説と同様に

「……」と語る。

と閉じられて、作者孝標女の感想・批判などは記されていない。

「子供心にも、この話に心ひかれ、じつと耳を傾けたのであろう。神秘の山、富士山に源を発すると、作者も語り手も信じている」^(註)が、実は「富士の山より落ちたる水」が、「富士川」ではなく、釜無川・笛吹川を源にして富士山の両側から駿河湾へと流れ行く川であることはすでに周知のところである。「富士山の信仰にもとづく靈験譚として語り伝えられていたものであろうが、作者の体内を通過して仕上げられ、作者の心のなかの東国への通路に据えられたものである」^(註)というわけである。

この富士川伝説は「まののてう」伝説の約二倍の長さでもって記され、語り手の語りを長々と続けた竹芝寺伝説と比較するに、その三分の一の長さということであり、竹芝寺伝説同様、この伝説においても作者の歌は見えない。

「まののてう」伝説が

……深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。

と記されて、「深き川」の流れが彷彿とする。続く竹芝寺伝説には川の語りなく、富士川伝説は

……いと暑かりしかば、この水のつらに休みつつ見れば、川上の方より黄なる物流れ来て、……

と記されて冷涼の感が漂う。つまり、孝標女は三つの伝説中、二伝説に「水」との関わりを示す。確かに竹芝寺伝説にも

①浜も砂子白くなどもなく、こひぢのやうにて
②蘆荻のみ高く生ひて

③瀬田の橋のもとに……瀬田の橋を一間ばかりこほちて、それを飛び越えて

④瀬田の橋こほれて、之行きやららず
と、いかにも「川」との関係が深く読めるであろう。だが、「川の水」が記されていなかった。

孝標女は三つの伝説を記するに際し、充分なる計算をしていたことが、いささか見えて来るであろう。

竹芝伝説に「けり」が多用されていたのに対し、富士川伝説が「き」で統一されているのは、「国の人」がこの話を自分で実際に体験した話として語っていることを示す。

この指摘も見える。それは「この語り手の自分の実験談として語っている。しかしいうまでもなくこれは巧みな話術なので土地の古伝説をば、自分が見たことのように語り聞かせたのである」と玉井幸助氏の述べられたところであった。

この語り手は何ゆえこのような古伝説をいかにも己の経験の語りにしたのかという点は判明しがたい。ゆえに、「ごきげん通りのためか、さもなければ報酬でも受けようというのか」との説も見えるようである。

では、この伝説を孝標女たちはいかなる思いで聞いていたのであろうか。この点に関して渋谷孝氏が

作者は、上京後の一家の不運をつぶさに体験していたので、父の任官が「思うやうに近き所になりたらば」という仮定の上での可能性を夢みていた。だから遂げられなかった願望が、更級日記の執筆時に、国司予告伝説に託されたものと考えられるのである。

と述べられたが、その通りであろう。

五 結び

すでに各節で触れて来たところであるが、ここで表示しておくべきことがある。それは以上三つの伝説において、すべての伝説に記

された事実が、見えないということである。たとえば、歌は「まのてう」伝説のみであった。それらを表示すると(○)有・(／)無

伝説		事項	
		歌	語り手
「まのてう」伝説	○	／	遺跡
竹芝寺伝説	／	○	水
富士川伝説	／	／	／

となる。つまり、孝標女は十二分に計画・計算して伝説の項を記し終えたのであった。

人の世の「あはれ」に関わる「まのてう」伝説、都への憧れに心わきたつ竹芝寺伝説、そして地方官孝標の子である作者が、十三歳にして富士川伝説の語りにも耳を澄ましていたことであろう。このようにそれぞれの目標があって記されたわけであるが、『更級日記』の「上洛の記」中で、とりわけ長く記しながらも、それでいて「……と語る」と結んだ竹芝寺伝説には、作者の心のきらめきまでも見えて来るようである。

孝標女はメモ・記録などを基にして、ある程度の年齢に達した時、日記を完成させたものと思われる。それは、作者が三つの伝説を記するにあたり、心を労して仕上げていたことによる結論ということになる。

以上、『更級日記』の「上洛の記」に記された三つの伝説について考察して来たのであるが、果して伝説は四つではなかったのかとの疑問もある。それは津本信博氏も

一、「まのてう」の伝説

二、「竹芝寺」の伝説

三、「在五中将」の故事伝説

四、「富士川」の四伝説が見える(注1)と述べられている。だが、通常『在五中将』の故事伝説(注2)は伝説として数えない。

①「東海上洛の記」には、その土地の伝説に関することが三つ取りあげられている。(注3)

②「地方の伝説が三つ書きとめられた……」(注4)

③「道中記の中に三つの伝説が記されているが、……」(注5)

など、いずれも三つとする。故に拙稿も伝説三つに従ったのである。

津本氏が増えられた『在五中将』の故事伝説は、

(1) 野山蘆荻の中を分くるよりほかのことなくて、武蔵と相模との中にある、あすだ川といふ、在五中将の「いざ言問はむ」と詠みける渡りなり、……

(2) 八橋は名のみして、橋のかたもなく、なにの見どころもなし。

と見えるが、いずれも作者が既に知っていた伝説であって、この時はじめて知るに及んだのではなかった。ゆえに本稿から除外したのである。

『更級日記』には「夢」が十一例見える。うち一つは姉の見た夢、もう一つは初瀬代参の僧の見た夢であるが、他の九例は作者の見た夢であった。これらの十一の夢はいずれも作者の帰京後のものであって、「上洛の記」には一つも記されていない。これも日記執筆の目的となんらかの関わりを有するものであらうと思われるが、この点に関しては稿を改め考察しようと思う。

(注)

(注1) 『更級日記評解 改訂版』(三三頁)

(注2) 講談社学術文庫『更級日記』上(二八頁)

(注3) 本文引用は、新潮日本古典集成『更級日記』(秋山虔校注)によった。以下同じ

(注4) 『更級日記』旅の歌(『女流日記文学講座』第四卷・一〇八頁)

(注5) 日本の作家14『更級日記作者 菅原孝標女』(四九頁)

(注6) 注1参照(四五頁)

(注7) 「更級日記構想論」(日本文学研究資料叢書『平安朝日記II』・二二頁)

(注8) 注2参照(四六頁)

(注9) 注3参照(二四〇頁)

(注10) 『女流日記』(一六一頁)

(注11) 注2参照(六六頁)

(注12) 注3参照(一四〇～一四二頁)

(注13) 吉岡 曠・新日本古典文学大系『更級日記』(三七九頁)

(注14) 注1参照(六一頁)

(注15) 注2参照(六六頁)

(注16) 「更級日記における〈東海道上洛の記〉の一考察―作品の文芸的世界における意味―」(平安文学研究第四十輯・昭和四十三年十二月・一八二頁)

(注17) 『更級日記の研究』(二七九頁)

(注18) 注16参照(一八一頁)

(注19) 三角洋一・別冊國文學『王朝女流日記必携・表現と論理』(一三三頁)

(注20) 注2参照(二八頁)

